55. 飛田東山

「飛田東山」という名前をはじめて知ったのは 2 年程前で、知人と青梅の天寧寺のことを話題にしていたときだった。その時はそれきりだったが、最近、『昭和史の隠れたドン　唐獅子牡丹・飛田東山』（西まさる著）という本を読む機会があった。

飛田は、映画「昭和残侠伝　唐獅子牡丹」で高倉健が演じた主人公のモデルといわれるが、筆者は映画は見ていないのでその評価はできない。が、本を読むと「仁義を重んじ体を張って弱きを助け強きをくじく」という任侠精神を強く持っていた人というのがよくわかる。それも「弱きを助ける」ことを驚くような大規模に行っている。

例えばダム建設工事。本によれば･･･。昭和 11 年の小河内ダム建設では予定地までの山奥の道路建設の大工事を請け負っている。この年に起きた二・二六事件は政党政治の打破と同時に貧富の格差も問題にしていたが、飛田はとばっちりの連座で拘置所に入れられた。そこで多くの罪人をみた飛田は、受刑者にやりがいのある仕事を与え賃金をきちんと支払う必要性を痛感する。そうすれば更正する、根っからの悪はいない、貧乏が悪いのだ、と考えた。それが大工事を引き受けた理由というのだ。飛田のもとに集まった荒くれの労務者は 670 名。山奥の宿舎を「日本精神修養導場」と名付け、労務者を「労士」と呼んだ。そして仕事の意義や人としての仁義、将来の見込みなどを熱く語り、給料の多くを貯金させた。甦った労士達の努力で工事は順調に進み 1 年半が過ぎた。そこに工事は無理と考えていた大手が割り込んで来た。結局昭和 13 年初夏に飛田は折角の「修養導場」を解散したが、得た和解金を労士たちに平等に分け与えた。が、飛田の手許は空っぽになったという。この痛快な捌きは飛田 34 歳の時だ。

このような活躍は、遡るがドイツのハーゲンベックサーカス団が日本に来たとき、巡業先の設営で協力したときも同じだった。困っているなら人種も何もなく助けたということだ。

飛田は明治 37 年 8 月 24 日茨城県大洗の生まれ。本名は勝造、東山は号で根ヶ布の小字という。本には書いてないが、天寧寺の飛田家墓には「飛田家海難記録之碑」がある。それには「明治 28 年 3 月 8 日大洗海岸沖にて遭難し船舶と共に全員 6 名水没。明治 36 年 1 月 6 日不幸にして再び大洗海岸沖にて全員 10 名海底に沈死。右海難事故の為飛田家は離散し、勝造は幼にして（7 才）他家に奉公の身となり、艱難辛苦に耐えて今日に到る然るにかねて依り我が祖先の霊を奉るべく云々」とある。この碑の建立は昭和 59 年 8 月 24 日で、11 月 14 日に亡くなる直前であった。幼い時の奉公のつらさは生涯にわたって脳裏から離れることがなかったことを窺わせ、後の活躍のバネになったのかも知れない。弱いものに味方するという生き方にも多分に影響したのだろう。

一方、飛田には別の側面もある。ダム建設工事前に朝鮮に渡っていたことやダム工事解散後に上海に渡っていた詳細（中国の民衆工作と本にあるが）は分かっていない。工事解散の 3 年後には故郷に崇拝する尊王攘夷の藤田東湖の銅像を建立し、町に寄付している。本によればその費用は現在なら 3 千万円。殆どゼロから 3 年の間にこのお金をどう工面したのだろうか。

飛田の交友は大物政治家・財界人・官僚・芸術家と驚く程多岐に亘る。岸信介・中曽根康弘・大野伴朴睦・鳩山一郎・赤城宗徳・穂積重遠・渋沢敬三・児玉誉士夫・笹川良一・小佐野賢治・川合玉童・吉川栄治等々である。飛田は公の多くの開発に関与している。交友関係と無縁

ではないのだろうが、私利私欲とは一切無縁だった。そして不思議なのは交友関係者等の自伝や回想録の類には「飛田」のひの字もないということだ。

本の中で飛田の行動で驚いたことの一つは、「建設省の課長クラス 30 数名と年 2 回の懇親会を 37 年間続けていた」「一民間人の飛田が主宰者で出席者は建設省のほぼ全ての課長」という個所だ。この懇親会は昭和 23 年（建設省発足の年）から飛田が他界する 59 年まで続いたとある。

結局、飛田東山とはどういう人物だったのだろうか。この文章の後半からイメージするのは「フィクサー的」であるが、私利私欲が全くないことや「弱きを助け強きをくじく」任侠的な実際の行動をみると、相反する概念に生きたようにも思えて一言で言い表す言葉が見つからない。「凄い人物・傑出した人物」である。

（文中敬称は略させていただきました。2021 年 8 月 1 日）

飛田勝造墓碑

（建立：昭和 39 年？　青梅　天寧寺）

（撮影：2021 年 7 月 28 日）

本には「昭和 40 年 3 月、飛田が自らの還暦に合せ告別式を行った。生前葬だが本格的な葬儀を行い参列者は一千人もあった」「墓石はスウェーデンから取り寄せたという御影石で高さ 2 m をゆうに超す」とある。

また、本には碑の背面の文章を見る岸信介の写真が載っている。

表

東山

飛田勝造眠

妻静

裏

洛西霊峰□□際
清水濡々注東海
東山得居霞之里
吟月聴□□花綻

昭和三十九年八月二十四日　□□庵　東山

還暦を記念して　飛田勝造　印印

（解読できない文字あり）

（海難記録之碑もこの墓碑も 8 月 24 日。飛田の誕生日である）